

# 焼け焦げた灰から

Grey 焼け焦げた

小さな彼が見上げる空はいつも灰色だった。

今日もその通りで、ついに涙が浮かぶのを堪えられなくなった。

いつもより少し遠くまで歩いただけに、どうしてこんなことになつてしまったのだろう。広い都の中でこうして転がる自分がとても小さな生き物に感じられた。

空の腹に力が入らない。動くことができず、しかたなく壁の隙間から覗く空色を眺めていた。灰が舞い、燃えさかる炎を反射する。視界に侵食し朱紅黒い霧をかける。

たぶん、このまま死ぬのだ。体が熱いのに凍えてしまいそうだと思う。

誰かとすれ違い、また手を離れた気もするが、もうよく解らない。

佐野比呂子

こんなはずではなかった。何もかも上手くいかない。忘れたたいと否定するたび、悔いるたび、彼の記憶と存在が薄らいでいく。

「キミキミ、つぶれてもついてもまだまだ歩いていきたいだろう

——

歌うような声に意識が引き上げられた。目だけを向けて見た旅装の影は、言葉に節をもたせてさえずつている。

「なあに簡単、立つて歩いて走ればいい、ティンダル老がその昔、追い立てられて逃れたように、灰にまみれた小さな子、炎と血に負けないように」

歌う旅人が彼の手を引いた。二倍はあろうかと思う旅人と一緒に走ると互いに歩幅が合わなくて何度もつまずく。それでもそのたびに手にした杖を使って支え、何でもないように進んでいく。そうして火から逃れる間に名を問われたが、彼はもう答えを探し出せない

かった。旅人はからからと笑う。

「了解だ、名前をどこかにやったひと、これも縁だ、お嫌でなければボクからひとつキミにあげよう、うん？　気まぐれさ」

こんな何ものでもなさそうな灰色の空であることだしね、と耳打ちした。

「とても今のキミと同じだね、名がなくなつて何者でもないキミ、何ひとつでもあれないキミ、まだ何ひとつないこれからのキミの先、とてもこのボンヤリ曇つた空と同じだ」

旅人は去り際に手にした杖を彼に握らせる。

「キミの徒手とじゆに少しの追加を——言ことば祝いはきをうたおう、ボクの名前、なにもでもないもの、旅するかたわれトネリコの杖、焼けた灰白、焦げた黒灰をぜんぶキミに告げよう、まだまだ歩くキミの焦げつき、そんな情熱に、灰色尽くしからのほじまりに、祝福を」

言葉を連ねて歌う様を彼は見つめ、新しい名前での一歩目を踏み出した。乾いた掌に力が宿る。体が動き、今何をすべきかを考えられている。瘦やせた足でもまた歩ける。

水路を隔てた向こうに、燃えていない地区の大店おたな邸ぢやが目に映った。

### Soi La 空のてのひら

音は風となつて消えていく。ひとの弦いとでは、どれほど手練り寄せても《律》が見えない。音無おとなしし、響おとこい、訪おとなうはずのすべてがすり抜けていく。《理》を掴むためのあらゆる試験が、手段が、精進せいじんが、虚空に腕を伸ばすようである。水に手をさらすようである。炎にさしこむと燃え尽きる。灰をすくえば旋風せんぷうにさらわれる。砂を掴めばこぼれて落ちる。世界の弦いとを手練るの、は、陽光ひかりの後ろと月光ひかりの先手のわずかな隙間を歩み続けるようである。

(Pen-Li Warlock [Universality])

「そういえばそれ、チェロケースなんですよね」

久しぶりに会ったソルは、薄ぼんやりと光を返す目でアッシュを見た。常通りふわふわしている。子供用の棺桶と同じ大きさの箱が、不釣り合いでいて似合っていた。背負うためのベルトは季節の半ばを過ぎてもまだ馴染まないのか、ぎ、と身動きの度に音を立てている。

前に会ったときに何か怖いことを聞いた気がしたが、思い出せない。ので特に重要なことではなかったのだろう。

「うん、とその記憶を頭から投げ捨てて、笑いかけた。

「チェロ、どんな音なんですか。聞いてみたいです、よかつたら弾いてくれませんか」

「そうか。だがすまない、チェロはもうないんだ。割れてしまった、碎けてしまった。わたしはチェリストではない」

ソルは詫びながらケースを床に倒して革のベルトを外す。次いで綿布の結び目を解くと、織りも染めも粗い布がばつと床に広がった。燭台の光を浴びて鈍い光沢を返す箱が現れる。錆びた留め具をひとつひとつ外し、蓋に手をかけたところで動きを止めた。

「君、この中に何があるか、解るか」

ソルらしい、はつきりと区切った聞きやすい声が問う。

「チェロがないならチェロケースじゃないですよ？ じゃあ別のなんですかね？」

「そうだ。私は代わりを入れた。だから今は、アレのケースと言って差し支えない。だが、もとはチェロケースだ。正しい形ではない。私が答えを出せない。問おう、君。演奏されない楽譜は音楽か？」

ソルはいつも理屈のようできて飛躍している。スイのように他人の考えを先取りするでもなく、彼は自己で完結してどこかに声を飛ばすのだ。

音楽設計図が完成した時点で音楽として成立しているのか。音楽

として成り立つには演奏が不可欠であろう、と奏でる側に立つアツシユは思っているが、それが総てに通ずる確証はない。

「質問がわかりません」

「私は違うと考えている」

あの、と手を前に出したが無視された。ソルは語る。

「音楽の構成成分であつて、前段階であつて、音楽そのものとは思えない。歌われない楽譜に意味はない。埋もれてしまうなら、はじめからなかったと同じこと」

だから、とソルは箱を開けた。

「この箱には、何にもない、が詰まっている」

古いインクと紙のにおいがアツシユに届く。ほこりを凝縮したにおい、紙魚の死骸のにおい、そしてなぜだか鉄錆のにおいが鼻をつく。

「まったく、書庫といい、わたしといい、私達といい、こんなはずじゃなかったことばかりだわ」

かつ、とチェロの駒が音を立てて転がり落ちた。

それ以外に楽器の形を作るものは入っていなかった。元々張られていた布は蓋にあつただろう弓留めごと破られている。無理に剥がされた緩衝材の跡が痛ましい。

旅人の衣服など比較にもならない。乾燥していて、触れただけで

崩れてしまひそうだ。

間違つても軽量化に成功したとかいふ品物ではない。何十年前のものかと問いかけても、きつと答えはないだろう。木箱に金属を打ちつけて布と緩衝材を張つただけの箱は、おそらく他に現存してまい。スイが言う品の先走りか、もしやするとその製品が発想されるよりも以前のものか——と白く粉ふく蓋を見つめる。

箱が使われてきた年月の分、駒が残つている分、なおさら棺桶に思われた。

ばかりと空いたケースの中、麻紐で束ねられた楽譜が適当に、されどびつしりと詰めこまれている。それらは日に焼け、乾いて変色していた。

黒い染みができていて、ほとんど書いてあることが見えないものもある。鉄錆のにおいはそこからだ。

かつてそこに収まつていたであろうものの末路も知れる。

「この掌には、何にもないが満ちているの。空疎な楽譜、チェロでなくなつたチェロ、とつくになくした魔術師のトネリコの杖。音楽家としても魔術師としても夢に破れて衰退して、ついにわたしみたいになつた、ぜんぶの成れの果て。こんなはずではなかつたこと、何にもないばかり」

ソルは女性の声で言い直した。

「君の瓶には清浄な水が満ちているけれど、杖色のアッシュグレイ。わたしの中は、何にもないで満ちている」

書庫に埋もれきつたことが、とりたてられるほどの特別な何かがあるに備わつていなかった証左だ。語られること、記されること、歌われること、こくわずか。音に聞こえず、風に乗らず、届くことなにかき消えた。

「ソルさん、その譜」

「わたしと私達の織りなした譜。代々延々書き続け、魔術の奇跡を目指して頓挫した紙片。魔術師の織式、君のピアノ同様、演奏に付随して発動する呪文の欠片。もつとも楽曲屋の譜であつて、演奏家の譜ではないの。魔術の技が盗まれては困るから、誰にも譲渡しないそう。使用者即ち作曲者、譜面が魔術陣、音の連続が詠唱……秘匿すべき技術なのですつて。一門の総代、楽曲屋にして魔術師のソルを継いで」

継承者のみに伝授され、使用者のみが詳細を知る。それは有用で有効な魔術条件のひとつに数えられる。

だが隠匿するが故に曲として評価されず、曲の形をとるが故に他者の解釈が介入する。魔術織式の制作者は使用条件をさだめ、発動手順をさだめ、効果範囲をさだめ、効能をさだめるのだが、この方法論で編まれた魔術では魔術になれないのだ。

その結果、と箱を蹴った。

「……時を経て——衰退して、一片の魔力もなくなつて。何もかもがこぼれていつた。言つたわよね、旅の終結つて。最初のソルが得た<sup>つかもと</sup>楽都の金葉と学都の銀枝<sup>かきくろ</sup>。ぼつきり折れて割れているのは皮肉かしら」

魔術を操る者でありながら、伝える者となりながら、その道から外れたからか。大切な魔術で大事な楽譜を抱えこんで秘密にした。他の誰かの声求めて住み処から這い出ることも、多分なかつた。

「歩いていて。何年でも何十年でも、心を保てるなら歩き続けられた。歩けることが嬉しい、またできる、先がある、そう言い続けていられれば。聖都、楽都、学都の他ならどこにだって行こうと——だけどやっぱり、望みが叶えられる場所はこしかなかつたわ」

疲労の色濃い旅人は、長い時間をかけて歩いてきた道程が徒勞に終わったと息を長く長く吐いた。死んでからでさえソルは方法を間違え続け、こんなはずでないという結果ばかりを手に入れたと、目尻に手をやった。

「そうね——心から嬉しいと思えることが、ひとつもなかつたわけではないけれど。驚いたわ、なくしたはずのわたしが浮かび上がった。凄いなね、ランは。単純な名前だったからかしら。偶然がこんなに嬉しいなんてね」

涙を浮かべた彼女は吐息で笑んだ。アッシュはソルに出会つた日の記憶を掘り返す。いくつかの単語が彼の脳裏に浮かんで消え、最後にエレアノーレの音階が浮かんだアッシュはやつと声を出せた。

「ソラさん？」

「正解。ただ音が繋がっているだけのなんてことない名前。君はGとAの音と呼ぶのかしら」

金属のメッキがはがれて傷んでいる。聴衆をなくした楽曲屋は衰運をたどり、代を重ねるごとに魔術師としてのあり方も失つた。

はじまりの記憶、だけは輝かしく、片方の手に金の葉、もう片方には銀の枝というふたつの才を持っていた魔術師の、これが光のくもる時を経た——結末、だった。

君らは金の葉だったな、とソラが楽曲屋として顔を上げた。

「はい。楽都金葉、声楽卒のピアノリストです」

「君も一度、葉が砕けたか。しかし二番目と三番目の願いは、どうにかなりそうだ。否、君達がいい。君達ふたりに頼みたい」

ばちん、ばちん、と鈍い音を響かせて箱が閉じられる。濃色の髪が彫りの深い彼女の顔に影を落とす。ほとんど生気のない顔でソラは薄く笑んだ。

「おしまいを告げるの。君も察したろうが、疾うに私達の刻限は過ぎてゐる。わたしの刻限も過ぎてゐるから、できればすぐに」

「スイさんの助けを呼んだ方がいいですか」

「君はスイランをスイさんと呼ぶのね。いいわ、できれば彼も」

話が決まるが早いのか、ふたりで彼の部屋を訪ねた。要領が悪いながら何とか一連を話すと、トントン、とスイは指でヴァイオリンケースを叩いた。

ト、と軽く指を跳ねさせて、ソラから渡された楽譜に目をやった。やけにゆっくりと見ているのは時間稼ぎなのだろうか。彼の曾祖父が残した学都の知識と、スイが自らの経験で知った知識を合わせて、彼女の願いが本当に叶うか考えているのだろう。

それからソルの楽譜達を眺める。

「……自己満足だからだろ。世界はいつだってどんな場所だつて、君の言うことに満ちている。ご本人的には精一杯でも、聴衆にとっては聴くに堪えない歌声だとか——解釈を拒絶する楽譜かい？ ただの陶醉だよ、そんなもの。弾き手と聴き手のない音楽、対象と使用者のない魔術は、どちらも。需要と供給、生産と消費は大切だよ。」

「そうね」

意外にもソラはあっさりと、スイに下された辛辣な評価を肯定し

て笑った。赤い瞳が花のような、なめらかな色をしている。

「もう一度、書庫に。願いを叶えに行くの。これから、知ってもらいたい、認めてもらいたい、思い知らせてあげたい。私達にも」

今までの総てがなかったことにはならない。だから、と彼女はこれから先の時間全部を変えにいく、と言う。

「魔術師の銀杖を失うことがどれほどのことかしら。もういつそバラ撒いてしまおうかと思つて。ギルベリアでしか叶えられない」

アッシュは目を丸くして彼女の解説を聞いていた。相変わらずそこかしこが飛んでいるが、ソルの語る言葉よりもソラのは丁寧だった。

「エレアノーレは排斥する性質、カイカノンの魔術は結界と限定、タルタメラントは飛んでいく羽、ロドリカードではただの音曲、楽都は秀でた者が多過ぎて、わたしなんかは残らない。なれど蒐集の国ならば、魔術師の国ならば、魔術のなり損ないの楽曲になれる。わたしも私達もここにあれる。曲を解いて魔術として使ってくれてもいい。わたしが背負うのでなければ、もういい」

「いいよ、手伝おう。アッシュも？」

と、スイは目をすがめてアッシュを見た。

「そう、じゃあ一緒に行こう」

スイはアッシュの返答を聞いて頷き、やんわりと微笑んで譜をソ

ラの手に戻した。

「ただソラ、譜には君の名前が足りない。手伝うのは構わないけれど、これはしてくれないとね。手放しにきたのは君だろう?」

たしなめるようなやさしい声音で、ここでも間違えているよ、と指摘した。柔らかな光を湛えた瞳でソラを見つめ、上辺に書き添えられているソルという署名を指さす。

「なめに簡単さ。それに二文字足せばいい。ソルを内包するのにも興じゃないか」

それに、ソルよりも音が多い、とアツシユは思う。スイは指を動かす距離で測るだろうが、アツシユが自身の演奏楽器を思い浮かべると、ソとラの間にある黒鍵を見つける。

彼女の名を言い当てた疑問符つきの声を重ねる。ソラという音に引かずられて自分が選択した声は、G・A・H、と綺麗に一音ずつ上がった。

ソラは息を呑んでばつと顔を上げた。そのまま目を見開いてスイを見ている。陽光色の瞳が輝いていた。

Ash 灰から

鍵盤を撫でてアツシユは目を閉じた。

望まれる空気、適切な楽曲を灰色の髪の青年は探す。水でできた

譜面台に楽譜を広げ、ペダルの上に足を軽く置いた。

きつと今、遥か北のあの山では小さな川が流れ出しただろう。上流からの雪代が砂ごと時間を流しこむのだ。くうるり、とん、こんこんとん、と水車小屋で小麦がつかれる音がする。ささやかな仕事をしして水は大河に合流する。

耕耘された畑に肥料と焼いた灰が撒かれ、種が植ええられる。ひしゃくですくった水を打ち、もった土を定着させる。

雲がかかる山には黒い塔が変わらず立っている。魔術で懐に抱える研究者を助け、この春も旅人達を送り出しているだろう。

灰色の彼は陽の当たる丘で奏でている。

鍵盤の上を指が跳ね、次々と彼が目指す音色が紡がれる。ピアノは水から成り、絶え間なくピアノリストに樂を注ぎこむ。渾々と湧き出す泉のように強く、渾沌のたまりのように底知れない力で奏者の手を引く。途方もないほど希望的な高みへ。伸びゆく旋律へ。

昔の記憶はくすぶっているものだけれど、と努めて忘れることをやめた青年はピアノを弾く。向き合うことにしたあれこれを、また上手くさばけない。僅かに少し、分け与えようと意図をもってピアノの弦を見つめる。

かつて救われた喜びを、見いだされた幸せを、またまた灰色をまたとって歩き続ける旅人は、音色が拡散するに任せてふり撒くことに

した。

にっこり笑つて一礼してから、彼は温かな草原に座りこんだ。寝転がつていたスイランがお疲れさまと声をかけてくる。

「それじゃあ、アツシユ。そろそろ」

旅人の足は元の速度に戻り、長く留まることなく移動し続ける。旅する者は常に進み、一步でも多く世界を渡ることが性質だ。いと高き黒塔は知識を収束し、その場にいる魔術師に世界の状態を教える。が、旅人はその足で世界の形を確かめる。

ごめんね、といつの間にかアツシユの膝に手を乗せていた子どもに、目線を合わせて謝つた。数日間、世話になっていた家の子だった。

「おれは旅する音のおにーさんですからね、行くときやいくんです。じゃなきや、みんなに会えていません。ランさん、あと一曲……この村はおれですね。前はランさんでしたもんね」

ピアノにもう一度向き合つた。

スイランのヴァイオリン譜はひとつ前に立ち寄つた集落で披露した。この村ではピアノ譜を演奏することになり、次に立ち寄る地ではスイランと一緒に弾くだろう。

ふたりで合奏するようになったからだろうか。ソラが遺した楽曲を奏でていると、演奏している自分以外の音も聞こえるように

なってきた。指の先にピアノだけではなく、ヴァイオリンもある気がするのだ。

「特別な楽譜ですよ、これは」

アシュレイ・グレイは彼女が描いた譜を彼の音で再現する。軽快な、空気を蹴つて駆け上がっていく旋律を人々に届けながら空を見上げた。

目標をひとつ増やしてくれた人にこの旋律を捧げる。託されるに相応しい人間に、引き継いで弾いていくことを叶えることができる。演奏家になろう。

歩み続けた旅人の情熱を音色にして解き放ち、高く響かせる。灰を撒いた畑にいつか実りがあふれるように、彼は水の鍵盤を輝かせる。

二〇〇八年 卒業